

2018 年度第 3 回物学研究会レポート

「空間と身体をつなぐ家具、美しい椅子とは」

宮本茂紀 氏 (家具モデラー)

川上元美 氏 (プロダクトデザイナー)

黒川雅之 氏 (建築家、デザイナー、物学研究会代表)

2018 年 6 月 25 日

空間と身体を結び、人にもっとも身近な存在である椅子。そのデザインと魅力について、家具の工房であるミネルバを会場に、代表の宮本茂紀さん、家具デザイナーの川上元美さん、そして物学研究会の代表である黒川雅之さんに多角的に語っていただくというセッションを開催しました。まず宮本さんが椅子や家具に向き合ってきた半生を語り、次いで3名によるセッションを行うという構成です。語り尽くせぬ熱い議論が交わされました。

以下、サマリーです。

「空間と身体をつなぐ家具、美しい椅子とは」

宮本茂紀 氏 (家具モデラー)

川上元美 氏 (プロダクトデザイナー)

黒川雅之 氏 (建築家、デザイナー、物学研究会代表)



01: 宮本茂紀 氏
川上元美 氏
黒川雅之 氏

■モデラーという仕事との出会い

宮本：こんばんは。自分の家具づくりを通して、私の生きてきた道をお話したいと思えます。

<最初にテレビ番組の録画を放映>

——椅子職人の宮本茂紀さんの仕事は、皇室御用達の椅子から列車、自動車のシートまでと実に多彩です。かつて、椅子職人の世界は上質な素材と極上の座り心地を追求する「芝派」と、ウレタンなどの新素材を使って新しいデザインの椅子を安く量産する大衆向けの「浅草派」の2つがあり、両者は反目し、互いの道を極めようとしていました。宮本さんは芝派ながら、大衆向けの仕事も積極的に手がけていたので、「ダボハゼみたいになんでも食いつきやがって」と批判も受けていました。

宮本さんは、本場西洋の椅子をいつか学びたいという夢を抱いていました。優雅な古典からモダンまで多彩なデザインがあり、座り心地も抜群です。38歳でイタリアに研修に行くと、モデラーと呼ばれる職人を知り、大きな衝撃を受けます。デザイナーが自由に発想したものを図面に起こし、座り心地よく機能性の高い椅子へと仕上げていたからです。このモデラーこそ、自分が追い求めていた職業だと決意するのです。

帰国後、モデラーとして活動を始めるものの、周囲からは冷ややかな目で見られていました。ある日、若いデザイナーからの仕事が舞い込みます。座面の形すらわからないような奇妙なデザインでしたが、さらに「座り心地にこだわりたい、とにかくふわふわにして欲しい」と注文されました。一枚のスケッチだけが頼り。この時、モデラーとしての答えを問われていると感じ、見た目の奇抜さを軽やかに裏切る、とびっきりの座り心地を目指します。不眠不休の二カ月を送り、葛藤の末、渾身の椅子「ウツリグツリ」（デザイン：ヒロネン）が完成しました。

柔らかすぎず硬すぎず、体を包み込む感触はまさにファンタジーをかたちにしたものでした。秘密は、硬さの異なるウレタンフォームを何層にも組み合わせた内部構造にありました。デザインが奇抜であればあるほど、機能性に欠けてはならない。この作品はアビターレ・イル・テンポでグランプリに輝き、翌年のポスターにも選出されています。その後、国内外のデザイナーと組み、職人のこだわりを飛び越えた先を見据えています。「椅子と名のつくものなら、全部、自分の仕事」と、数多くのユニークな椅子を宮本さんは生み出しています。

■折れないアルフレックスの椅子の衝撃

宮本：15歳からこの業界に入ってもう66年ですが、いつも挑戦しながら迷い、迷いながら挑戦するという生活を送っています。かつての仕事は古典的なものや天然素材が主体で、張替えや修理、象嵌の直しや蒔絵まで幅広く伝統的な技術で修復をしていました。やがて、高島屋関係の開発の仕事をするようになり、金属の構造とウレタンの塊を用いた新しい作り方が台頭していきます。

素材が変わると道具が変わり、価値観も変わってきます。私は、大きな変革期で、比較的早くから新しい技術にトライしてきました。ウレタンフォームでつくる家具というのは、極端なことをいえば職人の手でなくても椅子ができることを意味しています。それでも自分自身が新しい価値観をつくること、提案していくことに魅力を感じていました。

顕著な例が1969年に発売されたアルフレックスの「M7 (MODEL 7)」です。その2年後に「マレンコ」が発表されましたが、共に大きな衝撃を受けました。今まで訓練を重ねたわれわれの仕事が今後はなくなるのではないかと思うほどで、ショックを受けました。椅子が販売されていた小田急ハルクに行き、店員の目を盗んで、曲がりきるまで曲げてみたんです。当時で35万ほどでしたが、折れたらもちろん購入する気でいましたが、何遍やっても折れないのです。塩ビ管を芯に入れ、型（モールド）に原液を入れて発泡させるという成形方法で、背中や本体を曲げてもグニャとしなり、折れないのです。作り方がそれまでと全く違うのです。それまで、土手をつくるのか、布を貼るとかという技術を追求してきましたが、型をとるにも、もっと柔軟にできることがわかり、衝撃を受けたのです。これをきっかけに、私はアルフレックスと関わるようになります。

職人としては正直なところ、アルフレックスの考え方にも疑問は抱いていました。その時代のイタリアモダンの根底には、訓練された職人や技術者でなくてもつくれるような仕組みやデザインに傾いていたからです。でも過去に敬意を表しながら、未来を積極的に受け入れたいと思い、新しいウレタンの塊の椅子をつくることにも、非常に興味を持っていました。

■寝台車やクルマの開発に携わる

それからは、さまざまな仕事を手掛けてきました。CM用の車輪制作をしていた際は、ヒントを正倉院に収蔵される靴に求め、そこから縫製技術を追求し、ミシンの改良など2つの特許を取る発明をしたこともあります。

JR 東日本の寝台特急「カシオペア」の内装も手掛けました。それまで大きなものは経験したことがなく、初めての分野への抵抗から周囲は反対する声もありましたが、図面をよく見るとたいして難しいところがない。細かいパーツが組み上がっているだけで、自分としては恐れることがないとわかり、半ば強引に社内をまとめて受けました。

大局を見てから細部を詳細に観察し、どこが急所か、何に力点を置くかを掴みながら再構築していくのです。その繰り返しです。その中で、「事件」のようなことも起きます。寝台車の二段ベッドは一般的には3点で支持されていましたが、私はより有利な構造があると思っていました。しかしそれをつくる金物屋には自負から抵抗され、私の提案を受け入れてはくれません。そこで自費でサンプルをつくりました。そうしてようやく私の考える構造にすれば揺れが全然違う、揺れないことを示しました。今も私が考えた構造が使用されています。

日産自動車とは長いお付き合いがあります。90年代、日産は経営難に直面していましたが、その頃から私は将来を見据え、クルマの住空間としてのあり方や、明るいデザインについて考えていました。そこで、「マーチ」の未来形としてコンパクトながら中は明るく、エンジン性能がよく、インテリアのいいクルマを開発すべきだと提案したら、その価格帯のクルマに内装はかけられないと一蹴されてしまったのです。そこまでの段階ですでにかなりの費用をかけて開発していました。当時ブリヂストンにいらした林英次さんに相談したところ、共感してくださり、それならばトヨタに売り込もうと、交渉したりもしました。その後も、ニッサンでは「ダットサン 240Z (フェアレディZ)」で知られる片山豊さんとよく一緒に飲みに行き、新しいマーチを提案したりしました。スポーツカーを手掛けてきた方なので、「こんなクルマは好きじゃない」とも言われましたが、「でも宮本さんの考えは賛成する。俺の知っているところを紹介する」と、いろいろとアドバイスを受けたことも思い出します。

電気自動車の開発が進み始めた頃、川島織物はクルマのシートに使う、特殊な弾性繊維で、布状のばねを実現する新素材の開発を始めます。それが「バネックス」で、これ一枚で座り心地を確保することができ、快適性と軽量化・省スペースが可能となりました。その開発時にも協力しています。素材の扱い方や留め方など、できる限りのことを提案し、そこから川島織物は3つの特許を申請しています。

私は、デザイナーではありません。デザイナーや建築家、クリエイターのイメージを形にするのが仕事で、その位置付けを大事にしていきたいと考えています。デザイン的な美意識についても、できるだけ表現したくないのです。いろいろな人の考え方や価値観を理解することが自分のものの見方で、それが大事だと考えています。

■建築家やデザイナーとの仕事を振り返る

マリオ・ベリーニがデザインしたカッシーナの「CAB」という革張りの椅子はイタリア製ですが、日本で生産できないかとメーカーに誘われました。それならばまず椅子屋や鞆屋の原点であるイタリアの馬具工場で研修させてほしいと頼んで、2週間ほど研修させてもらい、それから生産に取り掛かりました。

ベリーニと打ち合わせをする中で、本当は、思想的にはキャンバスでつくりたいと思っていると明かされ、これにもトライしました。しかし、手間暇かけて仕上げても、それが付加価値として輝いてこないのです。結局、こちらの開発は見送りましたが、ベリーニは非常に喜んでくれました。実は、樹脂の入ったボール紙を中に入れていたのですが、時間が経ったら、樹脂が風化してぼろぼろになってしまいました。中止にしてよかった。続けていたら大変なことだったでしょう。

倉俣史朗さんの「ヨセフ・ホフマンへのオマージュ vol.2」という作品も苦労しました。電気を点けたり消したりするたびに電球が一個ずつ切れたり、一つの列が具合悪いと全体を剥がして修理しなければならなかったりしました。

隈研吾さんとは光を通しかつクッション性がいいソファを、川上元美さんとは光ファイバーを織り込む布を手掛けました。ソファは衝撃吸収剤としてゲル状のシリコンを使いたいと言われたので使用しましたが、溶けて流れるという厳しい現実にも直面しています。光ファイバーはハロゲンで光を通すのですが、うまく光が流れなくて苦労しました。やっていくうちに表面を削れば光が漏れると気付くわけですが、いろいろな勉強をさせてもらいながら、楽しみながらやっています。石上純也さんとの発泡スチロールの椅子では発泡率を低くする工夫をしています。

残念に思っているのは、ザハ・ハディッドさんです。25～26年前からのお付き合いがあり、当時は建築されない建築家のように揶揄されていました。日本では家具もやろうとする人がいませんでしたが、私は手をつけた。いろいろありましたが、「(これからは) 宮本さん、楽しい仕事をしよう」と言われていたんです。ザハが手掛けた北海道の北クラブの椅子は、今も持っています。

ものづくりとは、思いを形にすること。自分を掻き立てるものがあるから、ずっとものづくりに関わってきました。

黒川雅之さんの「ZO ソファ」では、モールドで発泡しなくても脚を改善すれば軽くなることを気付かせてもらいました。今は紙管で脚にしています。黒川さんはこの椅子の急所は

腰にある、女性のヒップのラインだとおっしゃいました。そこら辺のことはよくわからないので、それからは観察するようにしています（笑）。一つ一つ勉強させてもらいながら進んでいます。これからもどうぞよろしくお願いします。

■セッション

関：どうもありがとうございました。本当に広範なモデラーあるいはエンジニア的なお仕事をされていると改めて感じました。次に、川上さんに宮本さんとのプロジェクトをご説明いただきます。

川上：1976年にアルフレックスジャパンから「NT」を発表しましたが、その試作を宮本さんにお願ひしました。成型合板と革の特性を生かしたチェアで、イタリアンレストランの草分けである「キャンティ」飯倉本店に採用されたり、当時のアルフレックスジャパン社長の保科正さんのプロモーションが成功したり、よい状況で出発したように記憶しています。その後、少し軽やかな「NT-SLIM」を追加していますが、四十数年経て未だに変わらずに使われています。テープで編んだ座部では保たないかとも思ったのですが、いろいろと試作の結果、強度もあがり、当時としてはモダンな椅子に仕上がりました。

旭川のカンディハウスで、小椅子、ソファー、オフィス、会議用とシリーズ展開をした「モナド」をデザインしました、その折り当時宮本さんのところで「CAB」の国内製造をされており、その技術と同じタンニン鞣しの皮革を用いて子椅子の試作と、背と座部の商品製作をお願いしました、1983年のことでした。

海老原嘉子さんが主幹したニューヨーク・ソーホーの「Gallery91」の91に因んだ記念展に参加した折り、宮本さんが「ボスコ」シリーズを制作されていたのをヒントに、91種類の木を用いてピラミッド状のオブジェをデザインして作っていただきました。又「エコー」もさまざまな樹種を使いミネルバで商品化を試みたかわいい椅子です。

家具だけでなく、1990年代にはニッサンの2000CC、ハイクラスの乗用車の新しいタイプのシートのモックアップをお願いしたこともあります、マグネシウム・ダイキャストとテンション・ファブリックと低反発ウレタンの構成のシート提案や日本のハイエンドをテーマにしたコンセプトカーなどでも宮本さんにご協力頂きました。

黒川：ありがとうございました。座るものには、サドル、シート、チェアの3種類があります。サドルは馬の鞍から来ており、オートバイやモーターバイク、自転車などで使われています。人間が主体的に乗り物を操作できる椅子がサドルだと思います。それに対してシートとは、基本的に乗り物の椅子で、英語では座る場所のことをシートと言います。チェアは全く異なり、法王の椅子など権威的なもの、メンタルなものを中心にした長い歴史を持つものです。電気椅子はシートではなくチェア。ヒューマン・エンジニアリングは、シートの話です。クルマでいえば、長時間縛り付けて運転できるように、どうすれば疲れなくなるかと考えるのがシートです。人間を奴隷にする発想と言ってもいい。オフィスチェアは、シートとして発想をすることで間違いを犯している気がしています。その違いを何か意識したことが

おありだったら、お聞かせください。

川上：そうですね、目的別という捉え方でしょうか。人体をサポートする目的を一義的に捉えたものがシートとすると、チェアはまた古くは権威を象徴する装置であった玉座から床帳などへと時代と共に変遷し、人々の生活を豊かにする道具へと民衆化したというか。歴史の流れからもそれぞれの風土や文化的要素を背負っている、そこが面白いのではないかと思います。

宮本：僕にとっては、言葉で言うならばシートは座面として捉えてしまうので、椅子の一部分だと考えています。アームや背中と同じで、あまり椅子の種類として区別して考えることはないですね。

黒川：人間工学の野呂彰勇さんに「シートとチェアは違う」と言ったら怒られたことがあります。シートの世界をやっている人は、チェアに対して、コンプレックスのような意識があるように感じます。

川上：人間工学が生まれた背景に戦争や武器の世界と関係があるようです。目的機能が優先で、快適にすることに対しては、何も生まれてこない。

黒川：クルマメーカーは「シートのデザインは難しい」と嘆きます。どうしてもうまくいかないで、ポルシェ一台買って分解して研究しているそうです。それでもいい仕事ができない。椅子と違って気楽じゃないからです。コーナリングからさまざまな状況に対応しなければならぬし、難しい位置をピシッと決めなきゃいけないという、シートの難しさがある。その辺をもう少し聞きたいのです。

川上：しかし一般的にシートには生活の一部として心地よく運転を楽しんだり、愛を語ったりという側面があると思います。とにかく、人の雌型のようなシートは、生身の人間には居心地が悪いものです。

黒川：椅子は、家具の王様だと思います。なぜかというと、最初にできた家具が椅子だからです。椅子ができて、次に何か置くためのテーブルができた。建築が住宅から始まってやがて都市ができたのと同じで、建築の原点である住宅と、家具の原点である椅子は同じなのです。だから建築家は椅子をつくりたい、傑作をつくってみたいと願うのです。

川上：それは建築家の哲学、空間コンセプトを椅子に託した表現法でもありますね。

黒川：僕は日本における椅子のスーパー専門家は、宮本さんであり、川上さんであると思っています。日本中で椅子をここまでプロフェッショナルになさったのは、川上さんしかいないでしょう。

川上：いやいや、そんなことはないと思います。自分は、人を取り巻くもろもろの生活の道具と空間との関係のなかで、椅子の存在の奥の深さに興味が尽きなくて追いかけているだけです。

黒川：そもそも日本には椅子の歴史がないという、ものすごく大きなハンディキャップがあると思うんです。日本では床が椅子だった。実はこの秋を目指して椅子の本を書き終えたところなのです。椅子の専門家を前に、お恥ずかしいのですが、椅子をあまりデザインしてないからこそ、書けるとも思うのです。クールに冷めながら、ずーっと椅子の中にまで入っていく。ぜひ読んでやってほしいです。

川上：それは楽しみですね。

■優しい椅子に込めた思い

黒川：宮本さんの書かれた本は『世界でいちばん優しい椅子』。優しい椅子という言い方に、単語を考えて使われていると感じます。いろいろな言葉があるなかで、どう快適さを表現するか。

宮本：やさしい椅子というのは、多少、世の中に抵抗しているわけなのです。座り心地は人によって全く違う。そこにある種の思いやりみたいなものがあるべきだと思っています。社会の主導者に強制される、断定的に生活させる世の中へのささやかな抵抗をしているのです。

黒川：宮本さんの本の中にある吉田茂が白洲次郎氏より借りて使っていたという椅子の話も印象的でした。白洲さんは生前、その椅子の張り替えを宮本さんに依頼されたのですよね。

黒川：着古した下着みたいなものですよ。

宮本：そうそう。本来、社会もそこに意識しながら対応していかなくちゃいけないと思ったのです。

黒川：だから「優しい」とは、よく考えた言葉だと思いました。頭でつくっている仕事ではなく、身体感覚です。手の感触でつくっている人の選んだ言葉だな、と思いました。

宮本：ZOの椅子で、黒川さんにそういう官能のことを仕込まれているんです（笑）。

■なぜ木を使うのか

黒川：椅子が面白いのは、お母さんが「おいでおいで」と言っているように見えるときがあるのに、後ろ姿はお父さんの背中みたいに毅然としていたりする。素材のこともお聞きします。倉俣さんは「木は怖い」と言った、とか。なぜ家具は木が多いのか。なぜ川上さんは木を使うのか。

宮本：倉俣さんとはよく飲みながらそんな話もしました、天然素材の持っている個性というか、そこに本人は負けるような気がすると言われていました。

黒川：なるほど、負けるという感じね。

川上：倉俣さんの初期の頃にナラ材、木地仕上げの「抽斗の椅子」はありますね。

宮本：でもだいたい真っ黒に塗って、個性を消してしまうんです。

黒川：風合いは、僕もあまり好きじゃないのです。怖いという言葉までは出ないけれど、巻き込まれてしまう感じ。人間は、記憶と願望の真ん中で生きています。その記憶の中にある優しさというもの、つまり懐かしい記憶や情緒的なものが木をウェルカムにさせているのではないのでしょうか。反対に、新しい世界をつくらうとするチャレンジングな願望や夢みtainなものがプラスチックをウェルカムにしている。この2つの懐かしさと願望との間に、私たちはウロウロしているのかもしれないですね。

川上：木の文化は古いだけに、新しいものを生もうと思っても難しい側面もありますが、無意識のうちに人は木に対する安堵感や良心的なサスティナブルな要素を感じていると思います。

黒川：宮本さんは日々、木と寝ているんじゃないかと思うくらい、木のことに何十年とこだわってこられた。

宮本：実は、もうやめようと思ってます。

川上：突然、木をいっぱい買い集められた時期がありましたよね。

宮本：経済的に多少、余裕がある時にしていました。実際には、木それぞれの個性を比較・対照したりしていました。理論的には分かっていたのですが、比較・対照して覚えようとしていたのです。

黒川：日本の建築の棟梁は、木に対する思いが深い。森で木が向いていた方向、南の部位なら南向きに製材した木を使います。北の方で取った木は建物の北の方で使う。木を神様みたいに感じている。日本のカンナは四角くて、人間の手には合いません。だから引いて使う。ドイツなどヨーロッパのカンナは押すところが丸くなっていて痛くないから、ぐっと押して削る。この裏腹が面白い。恐らくヨーロッパの木はケヤキやブナ、ラワンなど堅木なので、堅いから骨を使った強い力が必要で、手に痛くないように丸い道具を使うのでしょうか。日本は柔らかい木なので、デリケートに扱ってきた。そうして指物の素晴らしさが生まれたのではないかと思っています。これ、僕の説ですから、違うと思われたならば反論してください。

人間と道具の関係は、ピタッと一体になるのではなく、非連続であるのが望ましいと考えます。体と道具との間には、適度な遊びが必要です。例えばボールペンで字を書くと、手にも紙にもピタリしますが、たいした文字は書けません。一方、毛筆で墨を付けると不安定ですが、だからこそ芸術的なものが生まれます。人間と椅子との関係も紙と筆との関係のような距離感が、遊びが必要だと思うのです。

川上：おっしゃる通りだと思います。

黒川：胸椎で座る椅子がありますが、胸椎を固定すると腰椎を駄目にしてしまいます。本来、腰椎で当てて、胸椎を自由にするのがいいのです。人間の体を自由にするのが、椅子の持つ最上・最大の条件なのではないでしょうか。僕は、人間の骨と筋肉を勉強して椅子論を展開しようと考えました。レオナルド・ダ・ヴィンチは、解剖しながら人間のデッサンをしましたが、それと同じ。やはり解剖学が必要だと思ったのです。

チャールズ・イームズは、再評価するべきだと思うくらいに見事に人間の体と椅子との関係を追求してきた人です。長老に近いわれわれは若い人たちに、感性はお前らでやりなさい、だけどこれだけはきちっと押さえるよということをもっと書いたり、言い続ける必要があると思っています。

宮本：イームズが重要である一方、全く違う意図も成立するのも椅子の面白さなのです。みんながみんな真面目でまともだったら、つまらない。例えば卒業制作で、強度を保てない作品は採点されない時代もありました。でも学生ならばある限界のものを挑戦するような思想があった方が健全だと思っています。

黒川：今日は椅子の権化のお二人に語って頂きました。特に宮本さんは若い人材と共働り、指導もされています。これからの「宮本教室」でガンガンやってほしいと期待しています。

Q&A

関：お時間が過ぎておりますが、ご質問やご意見はございますか。ぜひお願いいたします。

Q1 お三方に伺います。新しい素材に挑戦する際、トライアルの中の準備などで心がけていることはありますか。

宮本：要するにしっかり調べてないから失敗するんですね。失敗したら、「ああ、やっぱりそうか」、となる。失敗と成功の両方の可能性を感じたとき、危なげですが、僕はちょこっとやってみるんです。やっぱり駄目か、そこから次の段階へと踏み込みます。アクリルなど、相当な月謝を払って学びました。10センチ角の脚なんかでも、ポキッと折れるんですから。反対に思いがけなく強かったりもします。やってみなくちゃわからないことは多いですね。

黒川：僕としては、建築も家具も、小さいプロダクトでも、調べられることはまず徹底的に調べます。シミュレーションし、試作をしながら確かめていき、そこに経験が積み重なって判断できるようになっていく。宮本さんも木の表面から2~3センチ奥まで見抜いて判断していると思います。それくらい、木と付き合い慣れいますからね。

川上：使ってみたら驚くぐらい脆い木だったこともあります。やってみないとわからないことはありますが、アイデアを出すと同時にそれ以上にチャージしないと抽斗が空っぽになってしまうので、展示会に行くなどしながら、絶えずさまざまな情報を探し求めて入れています。例えば、チタンを使って椅子をつくるにしても、その溶接にはその部位をいかにシールドガスで大気から遮断するかが重要です。それをクリアしないと溶接できません。そこ

までの情報を引き出しながら、テーマに合ったものを探っていきます。

関：ありがとうございました。本日の前半のレクチャーでは、宮本さんがたくさんのデザイナーに指名され、無数のプロジェクトを実施してきたその秘密が明らかになった気がします。後半のセッションでは、ものづくりの大変さや魅力が広い視点で語られたと感じます。椅子づくりの現場の中でこういうお話を聞いたのは、本当に素晴らしい経験でした。宮本さん、川上さん、黒川さん、長い時間ありがとうございました。

以上

2018 年度 3 回物学研究会レポート
「空間と身体をつなぐ家具、美しい椅子とは」

宮本茂紀 氏 (家具モデラー)

川上元美 氏 (デザイナー)

黒川雅之 氏 (建築家、デザイナー、物学研究会代表)

写真・図版提供

01 ; 物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2018 BUTSUGAKU Research Institute.